

ガンダムブレイカー2 鉄血招来

岸山

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は現代——久しぶりにガンダムブレイカー2をプレイしていた半月 良は助けてという声を聞くと突然意識を落とす。

目を覚ますとそこはモビルスーツのコックピットだった。機体を起動させるとゲームで使っていた機体でも、初期の機体でもなく、なぜか収録されていないはずのガンダムバルバトスだった。

エイハブリアクター？ガンダム・フレーム？そんなものガンブレ2の世界にはなかっただろう！

自分の知っている世界ではないことに驚きつつも、生き抜くために頑張っていく。

これには転生、オリガン、なぜか鉄血のオルフェンズなどが含まれています。ご注意を

注意 これにはガンダムブレイカー2に出てこない機体、武装、設定などがあります。誤字、脱字報告お願いします。感想などお待ちしております。

目次

第1話：フロンティアIV襲撃	—	1
第2話：アークエンジェル強襲	—	14
第3話：デンドロビウム襲来	—	25
第4話：デンドロビウム撃退	—	36
閑話：フロンティアIV〜フォン・ブラウ	—	48

第1話：フロンティアIV襲撃

どうしてこうなった。

俺、半月 良はモビルスーツのコックピットにいつの間にか座っていた。

何を言っているのかわからないと思うが、俺も何をいつているのかわからない。でも実際にそうなっているのだ。

俺はガンダムブレイカーを家でプレイしていた。因みに3ではなく2の方だ。動画の影響もあつて徐々にプレイしていたのだが、思いの外はまってしまいパーツ回収に勤しんでいた。

だが、そんなパーツ回収にも飽きるもので久しぶりに1からストーリーを周回しようと思いつ。

そして最初のストーリーを受諾し、ミッションを開始しようとした所で頭に声が聞こえてきた。

「――助けて」と。

それを聞いた瞬間に自分の意識が落ちてしまった。

そして目覚めたらモバイルスーツのコックピットに座っていたという訳だ。雑な回想で申し訳ないがそういうことだ。

そんなことを考えていると唐突に爆破音が聞こえてくる。

一瞬焦ったが、そういうばこはコロニー・フロンティアIVで、今攻撃を受けているんだっけか。

俺はとりあえず、操縦桿を握るが、いかんせんモバイルスーツなんて物は俺の世界はなかったし、どうやって立ち上がらせればいいのかかわからなかった。

というか、起動すらしていないかもしれない。

とりあえず、目の前のタッチパネルの様な所を触れる。

すると、画面が光を放ち、システムが立ち上がる。

画面には英語で *What's your name?* と表示された。とりあえず俺は *You Hanzuki* と入力し、*yes* を押す。

その瞬間、機体に熱が走る様な音が聞こえると勝手に立ち上がり始める。

「わわわ！」

俺は慌てて操縦桿を握りしめる。

というかこの機体、ガンダム操縦席の様な形をしていない事に今気づく。どちらかというと鉄血のオルフェンズの阿頼耶識の機体みたい……

俺はそう考えているとこの機体がなんなのかを画面に表示された文字で知った

G U N D M B A R B A D O S

ガンダムバルバトスカよ！

待て待て待て！ガンダムブレイカー2に参戦なんてしていなかっただろ!?

それにここは元々はガンダムカラーの性能ほぼジムがいなかったか？よしんば機体が変わるなら俺がゲーム内で作った機体だろうに！因みに俺のガチは高難易度ミツシオンをクリアする為の厨機体だ！

だからか！だからバルバトスだったのか?!

俺が唐突にコックピットに乗っていたことよりも混乱していると戦闘音が大きくなってくる。

と、とりあえずここから出ないとな

俺は機体を動かそうとしたが、機体の動かし方を知らないことに気づく。

どうすりゃいいんだ……

そんなことを思い、足を少し蹴ると、バルバトスも俺の動きに合わせる様に蹴った。まさか、モビルスーツじゃなくてこのバルバトス、モビルファイターなんだろうか。俺はとりあえず手を動かしてみるがその時は動かなかった。

うーん？どういうこった？

俺は考えるポーズを取ろうと思う。その瞬間バルバトスが腕を組む。そこまでして俺は考えをまとめる。

こいつは俺の思った動きをする様になっているのか？

俺は歩く様に自分で思うとバルバトスを歩き始める。まるでエヴァみたいというかそのままだ。

俺はなれない感覚にさらされながらもなんとかハッチの側まで歩いていく。するとハッチが自動ドアよろしく機体を感じして開く。

そこでは原作通り、ガンダムエクシアとウイングガンダムが敵のデナン・ゾンを相手に奮戦していた。

そして今言うことではないと思うが何故俺は上半身裸なんだろうか

《誰だ？まだ機体が残っていたのか？》

俺が2機のガンダムに気付いたのと同じくしてガンダム達も気付きウイングガンダムがこちらへ接近してくる。エクシアも周囲を警戒しながら後ろ向きで接近してくる。

すると少々のノイズが流れるとこちらに声と映像が届いてくる。

「あー……」

《貴方逃げ遅れ？ 敵ではないわよね？》

ウイングガンダムからの通信になんと答えるべきかと悩んでいると今度はエクシアからも通信が入り女性の声が問いかけてきてさらに困る。さてなんと答えるべきか……

《とつかああまり見ない機体だな——さてこの反応……エイハブ・リアクター？とするとそれはガンダム・フレイムか》

俺がなんて答えるか迷っているとウイングガンダムから本来このガンブレ2の世界では聞くはずのない言葉が聞こえた。

「この世界にはエイハブ・リアクターがあるのか？」

《何言ってるんだ、300年前にあった厄祭戦の名残だろうが。まあ今では地球で多く使われているエネルギー元だが……いまじゃ学校でもならうだろうが》

《カレヴィ……今の学校ではそんなの習わないわよ》

《……まじか？》

女性から今の常識を教えられカレヴィと呼ばれた人が信じられないと言ったような声を上げる。

ウイングとエクシアの漫才みたいな掛け合いを聞いている間に言い訳を思いついた。

「あー、俺はリョウ・ハンツキっていうんだけど、シエルターに向かっていると戦闘に巻き込まれてたまたまこの機体に乗っ込んだ」

《…なる程な。操縦は？》

「…多少は出来る、と思う……こう言つてはなんだがMSを操縦するのは初めてでな……」

俺がでつち上げた過程を聞いてウイングガンダムのパイロットは更に質問をすると、今度は事実だけを答える。

「…というかこの世界に呼んでおいて何の知識も持たされていないんだけど。助けてと言われてもこつちが助けてほしいわ。」

《戦力にはならないと思つておいたほうがいいか……つてくることはできるか》

「…その程度ならできると思う。」

《まあ……こんな場所に一人置いておくのも夢見も悪い。ついてこれるなら後ろからついてこい》

「了解」

ウイングガンダムのパイロットとの通信の結果、この人たちについていくことにした。まあ他に選択肢はないんだけど

《それじゃあ貴方の機体を味方の識別認証するわ。私はレーア。この機体はガンダムエクスシアよ》

《俺の名はカレヴィ。そしてコイツがウィングガンダムだ。民間人である上操縦に不慣れな以上は敵が来たら身を隠せ》

ゲームで知っているわけだが、識別認証をするために登録する。

終わると同時にコックピットに警告音が鳴り響く。

「チツ、もう来やがったか！脱出するぞ！」

この中でリーダーとしての役割を担うカレヴィはすぐに声掛けをすると行動を始め俺もその後を追う。

《敵の部隊が来たわ!!》

「ッ！」

すると上空からは無数の銃撃が襲ってくる。素早くレーアが警戒を促すと俺は冷や汗を掻く。モニターが警告を出し、デナン・ゾンが七機飛来してくる。

エクシアとウィングがその七機を相手に立ち回る。

飛来してくるデナン・ゾン。武装はショットランサー、それにはヘビーマシンガンが

内蔵されている。その上、腕にはデュアルビームガンが装備されているし、ビームサーベルだって常備されている。設定上ならこのガンダムバルバトスにはビーム系は通用しないが、この世界は俺の知っているガンブレ2の世界ではないと思う。わからないことだらけだ。なのでできるだけ攻撃を食らわないように心がけよう。

《っ!!ごめん!ー機行ってしまったわ!》

「ゲッ……!」

レーアから切迫した通信が入る。前を見れば7機のうち、6機ははそれぞれ3機ずつレーアとカレヴィが相手取っているのだが、その内の一機が通り抜けて俺に銃撃を放ちながら迫ってきた。

「うっ……!?ぐっ……!!」

俺はとつきには動けず、両腕をクロスしながら防御する。

そして肉薄してきたデナン・ゾンがショットランサーをついてくる。が、背中ของブースターを吹かすことなんですのところまで回避する。

だが、勢いをコントロールすることができず後方のビルへと突っ込んでしまう。

「痛っ……!」

衝撃が身体を襲い反動で俺は頭を打ち付ける。

ぶつけた場所から血が流れてくる。

「ハンヅキ!!チイツ!!」

《ダメ、援護できない!!》

カレヴィ達も俺の状況を見て咄嗟に援護しようとするが、3機のMSは援護に行けせまいとその邪魔をする。

ビルに突っ込み、前後の衝撃が漸く収まったと思つて目を開けるとすでにデナン・ゾンは体勢を整え、腕に持つショットランサーのマシンガンを俺に向けている。

——死ぬ

そう認識するのに時間はかからなかった。少なくとも今置かれている状況は現実。だが、こんな時なのに俺は落ち着いていた。

なんでこんな世界に来たのか、だれに呼ばれたのか、知りたいことは山ほどあるが、俺は俺を呼んだ奴に言いたい。

——せめて操作や戦闘の知識をください。

【諦めないで——】

そんな風に思っていると頭の中に声が聞こえてくる。

この声は――

【あなたの動きたいように動いて――そうすれば――応えてくれる――】

やっぱり、この声は俺がこの世界に来る前に聞いた声！

お前か！お前のせいか！

【ごめんなさい――だけど――】

せめて呼ぶなら知識ぐらいよこせ！

【――】

そこから声が聞こえなくなる。なんと不親切な声だ。だけどそうか、動きたいようにか……

ならさー！

「オオオオ――ツ!!」

俺はマシンガンを構えるデナン・ゾンにがむしやらにバルバトスを突っ込ませる。

デナン・ゾンもこちらの動きは予測できなかったのだろう。懐にもぐりこみながら相手ごと向かいのビルに突っ込ませる。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

そのままデナン・ゾンは動かなくなる。恐らく振動に耐えられず気絶したのだろう。俺に明確に感じた死が遠ざかっていく感覚が体に駆け巡る。

俺はバルバトスを立たせるとそばに転がっていたデナン・ゾンのショットランサーを拾い上げる。

《ちいっ！》

デナン・ゾン三機を相手に立ち回っているカレヴィ達を援護するようにショットランサーのマシンガンを放つ。

だが、銃撃なんてしたことのない俺ではAIMが合う訳もなく、向かい合う機体同士の間を通り抜ける。

《おっと！》

その隙に足の止まったデナン・ゾン一体をカレヴィのウイングガンダムがサーベルで両断する。

よし、援護にはなったようだな。

次はレーアの方に

俺がそちらを向くとデナン・ゾン一体が俺の方に向かってきていた。

レーアを二機で抑えて、先にやりやすそうな俺の方へ来たってことか！

デナン・ゾンはショットランサーをこちらに突き出し、マシンガンを放ちながら向かってくる。

「ぐっー！」

装甲がマシンガンをはじくが振動は殺せていない。振動が俺を揺さぶる。

俺が何もできずに突っ立っているとデナン・ゾンのショットランサーの突きが肉薄している。

突き刺さる瞬間、俺の持っているショットランサーを横に振るい、それをはじく。

危ない、危ない。撃たれていても平気だからと言ってじつとしていく訳にもいかないんだよな。

「ふう……ふう……」

俺は心臓の鼓動を全身で感じながらショットランサーを構える。

デナン・ゾンも同じように構えると、マシンガンを放ってくる。

今度はブーストを使い、後ろに下がりながらビルの陰に隠れる。なんでだろう、こんな状況なのにいつも以上に周りが見えるように思う。どこに何があるかが分かるのだ、見えていないはずのビルだって、あるってわかったし。

デナン・ゾンが射撃を止めて、隠れた俺の目の前にでる。

が、俺はすでに俺の持つショットランサーを構えている。

そして

「ふううー！」

相手が突き立ててくるよりも速く、デナン・ゾンのコックピットを狙って突き立てる。槍は装甲を貫通し、風穴を開ける。貫かれたデナン・ゾンはスパークを起こしながら、起動を停止した。

殺した……

そんなことを思いながら肩の力を抜く。

実感が持てないが確かに殺した。だけど、俺の手のひらを見ると震えていた。これは恐怖からか殺してしまった罪悪感からか、それとも死が遠ざかっていくことへの安心感からか、よくわからない。

第2話：アークエンジェル強襲

すまん…。民間人のお前にMSの相手をさせてしまつて…》

そんなことを思っていると残りのデナン・ゾンを片付けたカレヴィから通信がくる。

モニター越しに震えている手をじっと見つめる俺とコクピット貫かれ動かないデナン・ゾンを見て状況を理解したんだろう。カレヴィは俺に謝罪してくる。まあ俺が戦力にはならないとしておきながら結局は俺が戦ったからな、仕方ない事だけど

《とりあえず移動するぞ。今はいつまでもここに居るわけには行かない行くぞ》

カレヴィの言葉には気遣いも感じられるが、それと同時にど現状の厳しさを感じられる。実際、この場に長居するのは得策ではない、早くに行動したほうがいい。

俺たちは大橋を渡りつつ、進んでいく。

どこに行くのかはゲームで知っているから俺はなにも言わないが、レーアがカレヴィに聞く。

《こっちは港だけど?》

《知ってるよ》

レーアの質問にカレヴィは当然のように答える。

《ちよつと待て。港は真つ先に制圧された筈でしょ？さつき貴方が言つてたじゃない》
《言つたよ》

レーアはため息をつくとかレヴィに少々怒気孕んだような、ため息交じりのような声で質問をする。

《何か考えがあるなら教えてくださる？》

《あそこにはアークエンジェルがある。アレに乗つて脱出する》

《救命ボートじゃだめなの？》

カレヴィがなぜ港に向かうかを話すとレーアが不満をもらす。それに対してカレヴィがため息をつきながら返答する。

《残っていると思うか？》

《まあ、そうよね……まったく災難なこと》

カレヴィの説明にこれから更に戦闘が激しくなることを理解したのか、レーアもため息をつく。

《リヨウ、動けるか》

「大丈夫」

レーアも納得したのを見て、俺へ再び声をかける。

頭をぶつけた時の傷が痛み、頭の中はグラグラするが、動く分には問題はない為返事をする。なんとなくこいつの動かし方に慣れてきた。

俺たちは三機で港に向かった。

《ところでなんでお前は上半身が裸なんだ？》

「……シャワーを浴びていたら敵が来て……」

《あなたもなかなか災難ね》

ほっとけ

「ふう……」

《MS戦が初めてと言っていたがなかなかできるな》

激戦区を何とか通り抜けた俺達は港地区にやってきていた。

遠距離での援護ができない以上、俺はできるだけ前に出ずに隠れていた。それでも俺の方に敵が来るのでそれを持ってきたショットランサーで時間を稼いだり、場合によっては撃破していった。

（殺さない方が良いんだろが俺にそんな余裕はないんだよ）

自分でも不思議に思うほどドライだと思う。元の世界では人殺しなんてしたことが

ないはずなのに、思った以上になにも感じないんだ。まあ俺が殺した死体を見てないからかもしれないが。

《さて、ここから港の中に入れる。警備も厳重だろうから気を抜くなよ、入口に入ったら一気に仕掛けるぞ》

そんな風に自身の変化に考え込んでいた俺だが、カレヴィから通信が入り気を引き締める。自分達は今、巨大なブリッジを超え、港の裏口にたどり着いていた。

俺たち三機は一気に強襲を仕掛ける。

「なっ!?!」

港内に入るとデナン・ゾンが5機、警備のためか立っていた。

だが予め警備などがあるであろうと踏んでいた俺たちはカレヴィの提案で攻撃を仕掛ける。ウィングガンダムの威力を抑えたバスターライフルの一撃が、2機を焼き払い爆散させた。

一気に3体MSが現れたことに敵側の5体から3体になったデナン・ゾンは混乱している。

「これでツ!!」

その隙をついてエクシアは一気に近づいてGNソードで2機のデナン・ゾンを両断す

る。

俺も残り一体となったデナン・ゾンのコックピットをショットランサーで貫く。

戦闘は一分もかからずに終了し奥へと進む。

入口の警備を無力化し、俺達は更に先へ進み始める。

カレヴィの案内のもとアークエンジェルが格納されているドッグへとたどり着くと物陰から様子を伺う。俺の意思でメインカメラが勝手に動いてくれるのでアークエンジェル周辺の敵部隊を確認する。

アークエンジェルに何機かのGN-XⅢ…。そしてEW版のトルギス…。たしかパイロットはエイナルだったな。

俺たちは隊長機がいなくなるまでしばらく待機しているとトルギスがアークエンジェルの奥へと消えていった。

これを好機と考えたカレヴィが号令をだす。

「隊長機が消えた、今だッ!!」

バーニア全開で強襲攻撃を仕掛ける。

「ビッキンヤッ!!」

レーアの駆るエクシアはGN-XⅢを流れるようなスピードで素早く二機、GNソードでそれぞれ切断する。

またその近くでもウイングガンダムはそのスピードで宙を舞いながら、出力調整したバスターライフルを放ち、GN-XIIIを三機纏めて撃破する。

俺もショットランサーを突き出す。が、強襲であつても他の機体とは違い、GNランズではじかれる。

「ちいっ！」

はじかれるとすぐさま俺は距離を取り、マシンガンをばら撒きながら撃ち続ける。適当でもこれだけ近ければ銃口さえ向けていれば当たる。

だが途中で弾が出なくなつた。戦闘時ちよくちよく使つていたせいか途中で弾切れを起こしたんだ。

おいおい、こんなところで勘弁してくれよ！

GN-XIIIがGNランズをこちらに向けて、GNマシンガンを放ってくる。

俺は盾にするようにショットランサーを前に投げる。

弾がないから誘爆はしないが、後ろに下がりながらよける。

敵が俺に注目しているとカレヴィがその隙に一体をビームサーベルで切り裂いた。

《大丈夫か!?!》

「ありがとう、平気だ」

GN-XIIIを一気に六機失つたことで副隊長機らしき機体は遅れながら攻撃を仕掛

けてくる。

だが、多勢に無勢。俺はともかくカレヴィとレーアの相手が務まるわけが無い。

しかし、俺の予想を裏切り副隊長が駆るGN-XIIIは2人を相手に善戦する。というよりも時間を稼ぐために無駄な攻めはしないという感じだ。特にレーアのエクシアと接近戦を避けつつ、カレヴィのウイングと接近戦をする様にしてバスターライフルを封じている。

ゲームではやられキャラだったから印象にも残っていないが、この世界では相当に腕が立つようだ。

俺は2人が戦っている間に失ったショットランサーの代わりを探す。カレヴィ達がGN-XIIIを倒した際に爆発せずに無事だったGNランスを見つけ、拾い上げる。

俺はGNランスを向けて、装備されているバルカンを発射して援護する。

これまでの戦いで多少慣れてきていたのだろう、真っ直ぐにGN-XIIIに向かっている。しかし俺の攻撃は左腕のGNシールドを展開されてしまいはじかれる。

だが足は止まった。その隙についてGN-XIIIにエクシアが急接近する。GNソードを振るい、左腕を肩から切り裂いた。GN-XIIIはGNランスを横に振るうがエクシアには回避された。

GN-XIIIが背を向けた瞬間、ウイングガンダムは即座に距離を取りバルカンを放

つ。そのバルカンは背中中の疑似太陽炉に直撃し、太陽炉が完全に破壊されることはなかったが、動きがとまる。

そしてウイングガンダムがバスターライフルを構え、引き金を引こうとした瞬間、声が響いた。

《———そこまでだッ!!》

「ちっ、戻つてきやがったか!!」

通信と同時にGN—XⅢとバスターライフルを構えるカレヴィの間に向かってドーバーガンのビーム。そしてトルギスはアークエンジェルの甲板に立った。

《一度ならず二度までも我が軍の艦を……この盗人がアッ!》

「チイツー!」

いっつも思うがいつ一回、軍艦を盗んだのだろうか。ゲームでなんとかやり直していたが全くわからなかった。

俺がストリーリーのやり直しをしていた時の記憶を蘇らせると、トルギスがビームサーベルを引き抜いた。そして背中中のブースターを吹かし、Gで人間を殺せる加速を利用して一気にウイングガンダムに接近していく。

素早く反応したウイングガンダムはバスターライフルを投げ捨てると、シールド内のビームサーベルを引き抜いてトルギスの攻撃を受け止めるように振るう。

「お前らが間抜けなんだよオツ!!」

《—ツ!?!》

鏢迫り合いになるウイングガンダムとトールギス。鏢迫り合いの最中、発したカレヴィの声にエイナルは面食らったような声を出す。

《その声…カレヴィかつ!?!》

「ああつ!?!誰だ、お前!?!」

《貴様ツ!?!この私を忘れたなどとは言わさんツ!?!》

カレヴィはとぼけたように言い返すとエイナルは怒って鏢迫り合いの最中に蹴りを放つが、カレヴィは当たる直前に後方へ飛び退く。

「ハッ!?!相つ変わらず暑苦しいな、エイナル!!」

《貴様も相変わらずふざけた奴だな!?!》

茶化すように話しかけるカレヴィにエイナルは神経を逆なでされたように怒鳴る。ふたりの間に緊迫した空気が流れる。

さて、こうなるとたしかゲーム内では次の展開は——

「——援護する!?!」

そんな緊迫した空気の中でレーアのエクシアがGNソードの複合兵装のビームライフルで援護射撃をしようとする。

そうだった、レーアが援護しようとするんだったな！

「バカ！手エだすなッ!!」

《——目障りだなッ!!》

エイナルのトールギスが背のブースターを吹かして一気に接近する。カレヴィが叫んだが既に遅くエイナルに標的にされたレーアに向かっていく。

ここでゲームではエクシアの前に俺の機体を出してビームサーベルでトールギスのビームサーベルをはじくんだが、俺にはそんなことできるだけの能力はまだないし、そもそもビームサーベル自体持っていない。

《早いー》

レーアは接近するトールギスを見て、思った以上の速度に驚いている。

「っ…………!!」

咄嗟に俺はGNランスのバルカンをレーアのエクシアとエイナルのトールギスとの間に放つ。

《クツ…………!》

このまま突っ込んだらバルカンの餌食になるトールギスは直前で急停止し、後ろに下がって体勢を立て直した。

俺はふう…………と息をつく。どうやら、ギリギリで間に合ったようだ。

トールギスはアークエンジェルの甲板に着地し、俺にメインカメラが向けている。どうやらロツクオンされたらしい。

「…面白いッ！」

戦意を燃やすのはいいがはっきり言ってやめてほしい。どうせなら美女からのコールにしてほしい。

第3話：デンドロビウム襲来

トールギスはビームサーベルを戻すとドバーガンを放ってくる。

俺はそれをスラストを吹かすことで機体を動かし、回避する。

「俺を狙うか……！」

《貴様が一番、やりやすそうだからな！》

そういうとトールギスは連射する。が、レーアのエクシアが援護するようにGNライフルを放ってくれる。

エイナルはそれをブースターで機体を浮かばせて、回転しながら回避しつつ、ドバーガンを正確に俺とレーアに射撃してくる。

こいつもゲームじゃAIでお察しだったが設定ではエースパイロットだったな……！ゲームと現実の違いがここまで出るか！

本来ならここで俺は覚醒状態になっているはずだが、そのイベントはキャンセルになっただけ。

トールギスは回転回避しつつ射撃をしているが、射撃の瞬間に足を一瞬止めている。その隙にカレヴィのウイングガンダムが肉薄しビームサーベルを振るう。

《ちい！外したか！》

《やるな、カレヴィ！》

ウイングガンダムのビームサーベルはすんでのところで接近に気づいたトールギスが回避行動をとり、避けられた。だかドバーガンを切り裂き、相手の射撃を封じた。

カレヴィは舌打ちをするとウイングガンダムはそのまま通り抜けて、後ろを取った。

そんなカレヴィの行動にエイナルは自分の知っているライバルが変わらない強さでうれしそうな声を上げている。

トールギスは周りを確認し、囲まれている状況を確認する。

《囲まれたか！》

《投降でもするか？》

《まさか！》

トールギスはビームサーベルを抜くとエイナルが決死の覚悟を決めた騎士のようなことを言っている。

だが、その戦闘も終わりを迎える。

《少尉！》

《チツ……!!時間か！》

副隊長が通信でエイナルに呼びかけるとエイナルは舌打ちをする。そういうとトール

ルギスは急降下し、動かなくなった副隊長のGN-XⅢの腰を抱き上げる。

《勝負は預けるぞ!》

そしてこちらを見るとそのような捨て台詞を放って撤退していく。

そんなエイナルをカレヴィはため息をつく。

《勝負なんて言ってるんなよ……恥ずかしい》

《どうするの? 追う?》

《いや、やめておこう。さつきあいつらが時間だとか言っていたからな。なにがあるかわからん》

レーアはカレヴィに撤退したエイナルを追撃するかどうか聞くとカレヴィはそれは悪手かもしれないと止める。

まあ、確かに何かがあるかわからないからな。

そんなことを話していると少しのノイズの後通信がくる。

《あーあー、聞こえていますか? こちらはアークエンジェルブリッジ、ルル・ルティエンス中佐です。現時刻を持ってアークエンジェル艦長代行に着任しました》

そう言うのと画面に紫の色をした髪を持つ少女が映る。

ゲームでは確かこの子の名前は知っているけど年齢はわからなかったんだよな。

《そう言えば、輸送艦に人を寄越すつて言つていたな。お早いお着きだが今までどちらに?》

カレヴィが思い出した様に言うと、これまで何処にいたのか聞く。するとルルは言いずらそうに口黙る。

だいたい察したカレヴィは肩をすくめる。

《捕虜になつていたと》

カレヴィが言葉にだすとルルはガクツと肩を落としてうう…と呻いていた。

すると今度は別の画面が開く。左目あたりに大きな傷跡が残っている人が映る。

《こちらは副官代行のマドツク少佐だ。すまんがドツクのハッチを開けて来てくれるか》

《了解した。つとおいハンヅキ》

確かこの人はルルのお目付け役の人だったけ。

俺がそんなことを考えないとカレヴィからの通信で我に帰る。

「ん?なんだ」

《おまえは怪我の治療でもしてもらつてる。俺たちだけでハッチを開けてくつから》

ああ、そう言えば頭をぶつけた時に切つていたつけ。

大した怪我じゃないから別にいいんだが、その言葉に甘えよう。

「わかった」

《というわけだ。艦長代行殿、ハッチ開けてくれ》

それだ言うとかレヴィとレーアは奥へと進んで行った。

《は、ハッチオープンして下さい》

ルルがそう言うのと、アークエンジェルの右側のハッチがオープンする。俺はビーコンに従いながら機体を着艦させる。

ふう、疲れた。

俺が一息ついていると外から声をかけられる。

「おーい、早く降りろー」

「あんたは？」

どうやら声をかけてきたのはいかにもベテラン整備士だっという感じがする褐色の肌をしたガタイの良いおっさんだったらしい。俺は疑問に思っただれか聞く。

「俺は一応この艦の臨時整備長クラーク・バリストンだ。そのガンダム・フレームの整備をしておけて命命なんだ。だから早く下りてくれ」

「了解」

俺はコックピットを開いて下りようとするすると突然ドック内に警報が鳴り響く。その直後、大きな揺れが襲う。

「な、なんだあ!」

クラーク達や他の人たちの悲鳴が響く。

あー、そういうえばガンブレ2のチュートリアルは少し長かったんだよな。俺は操縦桿を握って揺れを耐える。揺れが収まると体の重さがなくなったような感じがする。というか重力を感じない。

《こちらアークエンジェル、今の揺れは何なんですか?》

《アークエンジェルは無事だったか!》

さっきの揺れについてルルが通信で聞くとカレヴィは安心したような声を上げていた。だが戦闘音がそこから聞こえる。

《港のハッチはどうなりました?》

《その辺に浮いてるんじゃないか?!それよりこちらは敵と交戦中だ!アークエンジェルはそのまま隠れてろ!絶対に出てくるなよ!》

そしてそのまま戦闘音が響いてくる。

そんな中、ルル達の気の抜けた会話が聞こえてくる。

《副長代行、ハッチって浮くものなんですか?》

《古今東西ハッチは開くものです》

いっつも思うがルルは常識を知らなさすぎないか?もしくは天然なのか?まあ、俺の

疑問はどうでもいいか。

俺は開けたハッチを閉めてコックピットに座りバルバトスに熱を入れる。そしてクラークに声をかける。

「なあ、なにか実弾兵器はないか？」

「あ？あるにはあるが……ってお前出る気か!？」

「このままでもいかにしょ」

たしか今コロニーを強襲してきたのはルスランとデンドロビウムだ。

あの巨大な機体とそれを保護するイーフィールドジェネレーターはあの二人には相性が悪い。エクシアは近接戦向きだし、ウィングガンダムのビルゴのプラネート・デイツェンサーすら貫通するバスターライフルですら恐らくはじくだらう。そして何よりも機動力と物量が違いすぎる。

だからこそ外にいる俺が強襲を仕掛けることができる。最低でもイーフィールドジェネレーターを壊さないと。

「たつく……そりやそうなんだけどな」

「整備長ー」

すると、整備士の一人がクラークに話しかけてきた。

「なんか、変な装備があるんですけど……」

「あん？なんだそりや、どこにある」

「あれですよ」

クラークが整備士の言った装備がどこにあるか聞くと整備士は指をさした。

そこにはなんと、バルバトス用のメイス、刀、そして滑空砲が存在していた。なんでこんなところにあるんだ!?まさかバルバトスをこの戦艦に乗せる予定だったのか？

クラークはそれらに近づいて装備の確認をするとどうやら気づいたらしい。

「こいつは……バルバトス用の装備か？」

「どうやらそうみたいです」

「整備長、それをこのバルバトスにつけてくれ。ルル艦長、俺も援護に出ますわ」

《え？》

俺はクラークに武装の装備を頼むと、ルルに出撃の許可を取るために報告する。

ルルは面食らった声を上げる。なんにも言わないルルの代わりにマドックが答える。

《大丈夫なのかね？》

「平気ですよ。というかここでじっとしていたら二人ともじり貧で負けますよ」

《じゃあ、艦で援護したほうがいいんじゃないんでしょうか？》

「ルル艦長、たぶん二人は大型の敵か大量の敵と戦っていると思う。そんなところにかいであるアークエンジェルが出てどうするんだ」

《そ、そうなんですか？というかなんでわかるんですか？》

俺が指摘するとなんでわかるのかと聞かれた。さてどうするか……まさか「ゲームで知っている」なんて言えないし……つとそこで俺はいい言い訳を思いついた。

「さっきあった振動、その後に重力が解除された。たぶんこのコロニーぶっ壊れたんじゃないか？カレヴィは通信でアークエンジェルの無事を確認した、そののちに戦闘、その上出てくるなど言われた。ということはコロニーを破壊するぐらいの数の大部隊か、巨大なMAと戦っているんだろう。と予想したんだが」

《アツハイ》

ルルはわかっているんだかわかっていないんだか疑いたくなるような返事をしてくる。

マドックはなにも言わずに俺の言い訳を聞いている。

《君の予想ではどちらだと思っているのかね》

「予想では敵は大型の敵だと思えます。二人とも主武装がビーム兵器でここまで時間がかかっているということは恐らくは強力なIフィールドを持っているでしょう」

《ふむ……どうしましょうか艦長代行》

マドックは俺に意見言わせると出撃させるかどうかの判断を代行とはいえ艦長であるルルに判断を任せる。

ルルはええ!?!と驚いている。

《そうですね……わかりました、民間人であるあなたにお願いするのも心苦しいですがお願いします。えつと……ハンツキ?さん》

「了解。あとハンツキが呼びづらかったらリヨウでもいいよ」

《あ、はい。ではリヨウさん、準備ができたら出てください。でも一つだけお願いがあります》

なんだろうか?敬語を全く使ってなかったことに対しての注意だろうか。

ルルは真剣な顔をして言った。

《絶対に無事に帰ってきてください》

「……わかっているさ。俺もこんなわけのわからないところで死にたくないからな」

そしてしばらくすると左の背中の中左アームに滑空砲、右アームに刀を装着。そして両手にメイスを装備して準備を完了する。正直メイスはいらない気がするが。

俺がハッチから出撃しようとするマドックから通信が入る。

《ハンツキくん、そこにあるスペースジャバーを使いたまえ。移動する際に役に立つはずだ》

「あ、ありがとうございます」

《私が用意したものではないがね》

俺はスペースジャバーに機体をうつぶせに寝かせ、レバーをつかむ。すると俺の意思の通りにエンジンの熱が入り、ブースターが火を吹いて前へと進む。

そういえば俺、宇宙空間にでるの初めてだった……どうしよう。

《ところでマドックさん、なんで彼は上半身裸なんでしょうか》

《それはわかりません》

そういえば説明してなかったなあ。

第4話：デンドロビウム撃退

レーダーとアークエンジェルからくるナビゲーションを頼りに進んでいく。

するとやはりというか、バカでかい白い箱ことデンドロビウムがミサイルやらビームやらを放ちまくって戦闘地域がヒカリまくっている。

《ハンヅキ!? 何しに来た!》

「援護だよ!」

カレヴィが俺の機体をレーダーで捉えたのか、俺に通信をつなげてくる。

俺は言いつつ、背中 of 滑空砲を構える。

よく狙えよ……俺……こんなところでクソAIMさらすわけにはいかなぞ……

まだ射程圏ではないがそんなことを思い緊張する。

画面には写っているデンドロビウムを俺の認識と合わせるように黄色の四角いロツクが掛かっている。そして黄色が赤くなり、頭に射程圏内になったことが伝わってくる。

このコックピットシステムは阿頼耶識システムから有機接続デバイスを排除したシステムなんだろうか？

《新手か!》

すると俺に気づいたデンドロビウムの通信がつながり、こちらにステイメンのメインカメラが振り向いてくる。

「当たれよ!」

そして俺は弾の着弾予測をしながら、宇宙を泳いでいるデンドロビウムに滑空砲を放つ。

それと同時にバルバトスは勝手にスラストを吹いて慣性制御をし、機体をその場にとどめてくれる。便利な機能だ、この慣性制御がなかったら放った瞬間、俺の機体はグルグルと縦に回っていたことだろう。

滑空砲から放たれた弾丸はデンドロビウムに直撃する。だが直撃した場所はIフィールドジェネレーターには当たらず、背中に乗せる武器庫に当たった。

《貴様、ヴァルダー様からいただいた機体に傷を! ゆるさん!》

こいつこんな激情家だったわけ? 最初あったときは威張っていたけど二回目には大分理知的という感想を持った気がする。

つとこんなことを考えているわけにはいかないな。

デンドロビウムは俺の方に機体を向けてミサイル発射を発射してくる。

うおおお!? これ避けられねえ!

が、一線の光がミサイルを飲み込んでいく。これはウイングガンダムのバスターライフルか！

《おいおい、大丈夫なのか》

「一応ね」

俺はカレヴィに軽く返ししながら滑空砲をしまいつつ、スペースジャバーを上を浮かせてこちらに突っ込んでくるデンドロビウムをよける。

《なかなかやるようだが、一体増えたところで変わるものか！》

ルスランはそう言いながら機体を反転させる。そして武器庫が開いてマイクロ・ミサイル・コンテナを打ち出した。

俺たちはそれから放たれるミサイルを迎撃もしくは回避しながらそれを防ぐ。

《ハンヅキ、出てきたからには何か策でもあるの!?!》

「まあね！」

俺もスペースジャバーとバルバトスのスラスターを全開にしながら、ミサイルをよける。

レーアの言う通り、一応策はある。

《ちい！しぐとい奴らが！》

ルスランは墜ちない俺たちに苛立ちの声を上げている。その隙に俺はデンドロビウ

ムを挑発するように滑空砲で小突く。

そしてデンドロビウムが俺に視線を向けた瞬間、今度は別方向からウイングガンダムのバスターライフルが襲う。Iフィールドがある為、貫通はしていないがその威力に機体が揺らされる。

《鬱陶しい虫が！》

そんな風に憤っているルスランのデンドロビウムの前に俺はあえて背を見せるようにして機体を出す。

俺は後ろをチラリと確認すると獲物を見つけた獣のようにデンドロビウムの中にあるステイメンのメインカメラが光った。

そして俺を追うようにデンドロビウムが進んでくる。

《まづい！ハンヅキを援護しろ！》

《ええ！》

そんな姿を見た二人は援護するようにライフルをデンドロビウムに放つ。だがデンドロビウムは気にしないように進んでくる。

そして俺がロックオンされた警告音が機体に鳴り響いた。その瞬間、俺は機体を垂直に上へと上げる。

《逃がすか！》

俺を追うようにデンドロビウムも垂直に上がってくる。

真つ直ぐに俺は機体を上げている。それを打ち抜かんとデンドロビウムは大型メガ・ビーム砲を俺に向ける。

《これで終わりだ！》

メガ・ビーム砲が発射されようとしている。だがデンドロビウムのように巨大な機体の大型ビーム砲にはビームをチャージする隙がある。俺はそれを見逃さない。

俺はスペースジャバーを蹴り、俺の機体をデンドロビウムのＩフィールド側に押し出すことでメガ・ビーム砲の射程圏内から無理矢理外す。

その後すぐに機体のそばをメガ・ビーム砲の光が通り過ぎる。

俺はそのまま、向かってくるデンドロビウムの方にスラスターを吹かせて突撃する。

メイスをＩフィールドジェネレーターに投げ飛ばす。ガンダム・フレームの力で投げられたメイスはジェネレーターに突き刺さり、デンドロビウムのこちらに進む勢いは少し遅くなる。

《チッ！》

デンドロビウムは俺に取りつかれまいと機体をそらせようとするが俺は逃がすまいとスラスターを吹かせてジェネレーターにしがみつく。

そして俺はメイスの持ち手をつかみ、ジェネレーターの上に立った。メイスを引き抜

いて大きく振りかぶる。そして――

「おおおおおおお!!」

俺は雄たけびを上げながら、叩きつけた。

ジェネレーターはスパークを上げ、煙を吐くがまだ、ファンのようなものは回っていない。これでは足りないか!なら滅多打ちだ!

俺は左アームにある滑空砲を再び構え、ファンを打ち抜く。

《離れろ!》

「そんなに言うなら離れてやるよ!」

三発ほど打つと、ステイメンは長く伸ばしたアームで背中にあるビームサーベルを引き抜き、俺に振るう。それを紙一重でデンドロビウムの外側に転がりながら回避する。そして回避しつつ、最後にジェネレーターの横っ腹にメイスを叩きつけてやった。

《クソツ!》

その一撃が決め手となったのだろう。ジェネレーター全体にスパークが走り、煙が上がった。ルスランは悔しそうな声を出し、ジェネレーターを切り離れた。

よし、これでアイツのIFフィールドは封じた!

俺はレーアとカレヴィの二人に指示を出す。

「IFフィールドはぶっ壊した!いまだ!」

《たく、無茶しやがって!》

《でもチャンスよ!》

二人は、でかい的となったデンドロビウムに攻撃を開始する。

ちょうど形としてはデンドロビウムはカレヴィ達は無防備な上を見せている状態なので、的は大きい。

レーアはエクシアのライフルを連射する。そのビームは右の武器庫に全弾直撃し、熱で中の武器ともども誘爆する。

《ぐわっ!》

《驚いているところ悪いがこいつで終わりだ!》

そしてカレヴィはウィングガンダムของバスターライフルで、下半身の巨大なブースターを打ち抜いた。ブースターがスパークを上げると爆発し始める。

《なんだと!クツ!》

爆発に飲み込まれる瞬間にルスランはデンドロビウムからステイメンを分離され脱出した。

ステイメンはこちらチラリを見ると、そのまま戦闘空域から離脱していった。

終わったか……

「はあ~~~~……」

俺は大きく息を吐いた。やっと終わった。

如何せんゲームとは勝手が違いすぎるてどうしよもないが、何とかなってよかった。ゲームでは体力があっても、現実では一撃で落ちるんだよな……

《よくやった。アークエンジェル、もう出ていいぞ》

《了解した。艦長代行、号令を》

俺が身体のを抜いているとカレヴィからお褒めの言葉を賜る。そして付近に敵はいないと判断してアークエンジェルに合図を送る。

それをマドックが了解するとルルに発進を促す。そして戸惑いながらもルルは号令を出した。

《アークエンジェル発艦してください》

《了解いたしました。アークエンジェル発艦》

そして破壊されたコロニーの残骸の海を進んでくる。

レーアは周りを警戒しつつ、こちらに通信をつなげてくる。

《周りに敵はいないようね、帰るわよ》

《そうだな、ハンツキ行くぞ》

俺を領いて、背中のブースターを吹かそうとすると、バスンツという音とともに動かなくなる。いや正確に言えば動く、使えなくなっただけのは推進剤が切れたからだ。

「わりの、推進剤切れた」

俺がそういうとレーアはため息をついてカレヴィはやれやれといった風に頭を振るう。

《たつく、仕方ねえな》

カレヴィという俺の機体の腕を掴んで引つ張って運んでいく。

そしてハッチに入ると、俺の機体は両ひざをついた。その後、唐突に眠気が襲う。

《おい、機体自体は動くんだろ？とつとガレージに入れろよ》

「悪い……もうだめ……眠……」

《おおい!?こんなところで勘弁しろって!》

そんなカレヴィの叫びを最後に俺の意識は遠のいていった。

俺は夢を見ている。頭に映像と声が響いてくる。

——この世界には戦いが満ちている。

その声が聞こえると二機のムサイが艦のメガ粒子砲を放つ。そしてそのムサイから

ザクが二機出てくる。一機は指揮官機だ。

「すぐ戦闘だぞオツ!!」

指揮官機が指示を飛ばすと、二機の艦のうちザクが出てこなかったムサイが攻撃を受けて轟沈する。

「チツ、下手糞が…。きたぞ!!」

前を振り向くと向かってくるジムにザクマシンガンを放った

——積み上がる瓦礫の山

ジムとザクの銃撃戦が始まる。

ジムはシールドでマシンガンをはじくと新兵を思わせる声とともにビームスプレーガンを投げ捨て背中の中のサーベルと抜いて、突撃する。

「こんのおっ!!」

「馬鹿なアツ!?!」

そして、そのサーベルは指揮官機を切り裂いた。

——繰り返す争いの歴史

ジムはやったぞと喜んでいると上からギラドローガが二機接近してくる。

「ノロマがーッ!!!」

女性の声が響き、ギラドローガのシールドに装備されているシュツルムファウストを二発放つ。

ジムは放たれたシュツルムファウストをよけようと必死に回避するが、接近を許しすぎたためかよけきれず、直撃する。

「うわあああああーっっっ!!!?」

そして新兵の乗るジムは爆散した。

———でも…それでもわたしは信じてる

ジムを破壊した女性に乗っているギラドローガはぐつとマニピレーターで親指を立てて隣にいたギラドローガにアピールする。

だがその隣のギラドローガは下から来たビームに貫かれて破壊された。

「———なっ!?!」

驚くがすぐに女性のギラドローガも同じビームに貫かれて消えた。

「…進路クリア、次の戦域へ移動」
撃ったジェスタは機械的に処理し爆発の音や戦闘をしているところに介入するため
に進んでいく。

———人はいつか 戦いの無い世界を作り上げると

俺はその願いは正しいと思うけど———それは無理だ。

そう答えると目が覚めた。

閑話：フロンティアⅣくフォン・ブラウン

知らない天井だ……

俺が目覚ますとエタノールのおいが鼻につく、ここは医務室か。周りを白いカーテンに囲まれている。

とりあえず、起き上がろう……あれ？身体を置き上げようとすると何かに固定されていて阻まれる。なんだこれ？

カシャンカシャンと音を立てながら俺は起き上がろうとするが外れない。そんなことをしているとカーテンがシャツと開く。そこには銀の長髪をした女性がいた。首に聴診器をかけており、白衣を羽織っている。ちらりと顔を見ると整った顔立ち、そして無表情だがなぜかごみを見るような視線を感じる。

「あら、起きたのね。そのままくたばれば良かったのに」

そしていきなりの罵倒、俺は彼女に何かしただろうか……？いや俺が倒れたことで迷惑はかけたんだが

「あの……これ、外してくれませんか？」

「自分で外しなさい。赤ん坊じゃないんだから」

「外れないから頼んでいるんですが……」

そういうと女医ははあ……とため息をついて椅子に腰を掛けた。

「腕を引き抜いて、自分で外しなさい」

ああ、そうか。そうすればいいのか……あれ？抜けない？

「抜けないんですが」

「それはそうよ。私が固定したんだから」

「なにやつてんだあんた。とうか何がやりたいんだ」

俺は訳が分からない女医になんでこんなことをしているのかを聞いた。そしたらすげえいい笑顔で答えた。

「人の苦しむ姿を見るのが私の趣味よ」

うわあ……後ろにまさに愉悦という文字が見えるようだあ……じゃねえよ！外せよ

！

それから五分ぐらい俺の抵抗を見ると女医は俺の拘束を外してくれた。

「たつく……あんた、なんで医者やってるんだ」

俺は起き上がるとさつきまでの敬語はなく、完全にため口で話していた。

「なぜって、医者になれば人の苦しむ姿が一番見れるでしょう？」

「ここに来る奴らは苦しみたくて来ているんじゃないんやで？」

むしろその苦しみから解放されたくて来ているんだ。

俺はこいつにはあまり近づかないようにしようとか心に誓った。そうしていると医務室の扉が開き、そこからルルとレーア、そしてカレヴィが入ってきた。

「あつ、リヨウさん起きてらしたんですね、良かったで……す」

「元氣そうじゃねえか」

「ルル? どうかしたの?」

カレヴィは片腕を上げながら軽く挨拶をする。ルルは俺の姿を見ると視線を外しながら時折ちらちらと俺を見ている。レーアはそんなルルを不審に思ったように声をかける。

「えつと……」

「ああ、なるほどね……ハンヅキ、あなた服着なさい」

言いよどむルルの態度で察したレーアは俺に服を着ろと言ってくる。そう言えば俺、上半身裸だったな……というかいつまで引つ張るのだろうか、このネタ。

「つつつてもな、服持ってないしな」

「でしたら、軍用ですけどシャツお貸ししましょうか?」

「お願いします」

どうやらようやく上半身裸の原人を卒業できるらしい。俺は頭を下げ俺よりも身

長が低いルルに頼んだ。

「頭をあげてください。それじゃあ持つてきますね、待つててください」
そういうとルルは医務室から出て行つた。

カレヴィは俺に肩を組むとにやにやしたような表情を浮かべている。

「それにしてもハンツキ、お前あの子とずいぶん仲良さげじゃないか」

「そうね、あなたのことをリヨウさんつて言つていたし」

ああ、そのことか

「別になんともないぞ。ハンツキつて呼びづらそうだから呼びやすいほうでいいつて言つただけだ」

リヨウつて呼んでいいといったような気がしたが、別にいいだろう。

二人はふーんと言つと納得したんだかしてないんだかよくわからない顔をしている。

「じゃあ、私もリヨウつて呼んでいいのかしら？」

「別にかまわないよ。呼びやすいほうでどうぞ」

「そう？じゃあ私もそう呼ばせてもらうわ」

「お、それじゃ俺もそうするわ」

そんな風に話していると医務室の扉が開く。どうやらルルがシャツを持つてきてくれたらしい。

俺はそれを受け取り、着ると医務室を女医以外で出て行った。とりあえず、あの愉悦部の部員であろう女医にお礼を言っておこう。

「一応、ありがとう」

「そうね、今度は生きるか死ぬかの直前になってからここにきなさい。思いつきり苦しむ姿を見下してあげるから」

お礼を言ったらこの通りだよ！もう二度と来るか！

「あいつは一体何だったんだ……」

俺たちは医務室から出た後、アークエンジェルブリッジに向かっている。

俺がさっきの女医の態度に疑問が尽きず、つぶやいた。それを聞いたルルは乾いた笑いを上げながら説明してくれる。

「カレンさんは少し変わっていますから……」

女医の本名はカレン・オルレアン。年齢24歳、身長は164cm。長いウェーブのかかった銀髪と金の瞳がまず目を引く女性。

言葉を交わさなければとても美人であるが、実態は極度のサディスト。その上、さっきの俺との会話を見ていればわかるがかなりの毒舌家。

趣味は人の苦しむ顔を見ること。

腕は確かだが、医者になったのは一番人が苦しむ姿を見れるため。

性格からしてかなりの難があるが、軍内部では一部の兵士達からずいぶんな人気を誇っているらしい。どうやら、地球軍の兵士はMツ毛をもつ者が多いみたいだな。ファンからは「天使の姿をした女王」とひそかに呼ばれているとか。まあ俺が知ることができている時点でひそかでもなんでもないが。

以上が女医——カレンの解説だ。

なんというか……コメントに困るな……

「軍の男性兵士たちのアイドルか何かか、あいつは」

「あながち間違っていないかもな」

つうかなんでカレンがここにいるのかが分からない。普通に前線で軍医でもやっていればいいのに

そんなことを思っているとブリッジに到着した。

「マドックさん、変わりありませんか？」

「現状、敵軍の反応は捉えておりません」

ルルはそういいながら、艦長席に座る。すると通信士から地球軍から指令が届いたという。

「つないでください」

《こちら地球外円軌道大隊、メッド大佐だ》

するとブリッジの画面に色黒のおっさんが映る。

「こちら、アークエンジェル艦長代行、ルル・ルティエンス中佐です」

《さっそくだが、旗艦への指令を言い渡す》

概要を説明すると、まず月の中立都市フォン・ブラウンに行き、避難民を下す。その後、月基地で補給と人員配属を行ったのち地球に降下、地球での犯行作戦に参加するというものだった。

それを聞いたカレヴィは異を唱える。

「待つてください大佐。我々はコロニー軍に目を付けられています。そんな中、中立都市に艦を入れたら敵が襲ってくるでしょう、民間人を巻き込むわけにはいきません」

《だが、無関係である民間人を月基地に入れるわけにもいかん》

「ですが……」

《カレヴィ少尉、これは命令だ》

「……………」

このおっさんは月基地の機密を見られるぐらいなら中立都市に戦闘を持ち込む可能性があるけどそこでおろしてしまえと。邪推するならフォン・ブラウンの民衆の敵意を

襲ってきたコロニー軍に向けさせようとしているのではないだろうか。

「了解しました。これより我が艦はフォン・ブラウンに向かいます」

《うむ、よろしく頼む。あと、そこにいるMSを操った民間人だが……》

ルルが命令に従うと敬礼すると、今度はどうやら今度は俺たちについてらしい。だがあつさりするほど簡単に終わった。というのも――

《君たちの処置は月基地で追って伝える。以上だ》

それだけいうと敬礼をして通信を切った。どうやら俺とレーアの扱いは月基地で決まるらしい

カレヴィははあ……と息を吐くとブリッジから出て行った。

まあ確かに気持ちはわかるけどな。

「これより、この艦はフォン・ブラウンに向かいます」

「了解しました。発進、機関最大」

ルルが号令を出すとマドックが追従するように号令をだす。

さてさてどうなることやら……

俺は敵が来るまで休んでいいと言うことだったので、兵士が使う部屋に案内される。避難民もいる中で個室が与えられるようだ。

しっかし、俺はここにいてもやることないんだよなあ……

すると部屋に通信音が鳴り響く。俺は部屋にあった電話を取ると整備長であるクラークからだった。

『おうハンツキ、クラークだ。少しいいか?』

「なんだすか?」

『いや、お前の機体の整備でな……』

クラークが言うにはなんでもバルバトスが俺が眠りについて医務室に運ばれると自動的に機体の電源が落ちたらしい。それだけならよかったが、機体の整備をするために機体を立ち上げようとしたが、内部外部含めていろんな方法を試したがうんともすんともいわない。ということでその機体を操縦していた俺に声が掛かったということだ。

「わかりました。今から行きます」

『わりいな』

俺は了承すると電話を切り、部屋をでた。

さて、どうやって行こうか?ととりあえずエレベーターのところまで行こう。

「おうハンツキー！やっとな来たか」

この機体ドックに来るまでに30分かかったんですけど。

俺はクラークに謝りつつ、バルバトスのコックピットに乗る。そして画面をタッチする。そうすると普通に起動音がなり、熱が入った。普通に動くじゃん。

「普通に動きましたよ」

「あん？どういうことだ。まあいいかこれで整備できる」

俺は外にでるとクラークがコックピットに入り、タブレット端末にコックピットをつないだ。俺は暇なので整備がどのように行われているのか見学している。

「おうハンツキ、電源がお前以外に入れられなかった理由が分かったぞ」

「なんですか？」

「どうやら、この機体には特殊なシステムが走っているらしくてな、お前の生体情報を感じなければシステムはおろかこのバルバトスのツイン・リアクターの起動すらできない」

「なんでそんなものが……」

「さあな、コロニー軍の奴らが作ったシステムなんだろうよ、大方初期の状態でたまたまお前の生体データが登録されたんだろうよ」

それだけ言うとかラークは整備に戻っていった。どうやら俺は部屋に帰っていいら

しい。そうだな……部屋にパソコンあったし起動でもしてみるか

そんなことをしつつ、休んでいるといつの間にかフォン・ブラウンについていた。

そして避難民を下していると案の定というか予定通りというか、コロニー軍が襲撃してきた